

選者 川口孤舟

参加者 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤とみ子 在間千恵 佐藤ただしげ

豊田ゆたか 西澤國護 長谷見びん 古川百合子 星田啓子

投句・選句 今井紀久男 熊谷くにお 小早健介 高橋康敏 田島正己 土谷堂哉 中川雅夫

福島正明 古田昇 宮内規雄 山崎亜也 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 伊賀山そらお 梅崎くすお 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆

早川允章 山本三恵

【互選句】○は選者の「天」 ◎は孤舟選者の選 《吟》は吟行句

十一点 ◎病室は海見ゆる丘初浴衣 盛雄 (紀・くす・忠・孤・健・と・清・康・ゆ・び・け)

十點 《吟》首伸ばす亀の孤高や走り梅雨 啓子 (そ・くす・健・龍・清・堂・○隆・昇・け・盛)

七點 郭公鳴く茫々と風渡る中 規雄 (○そ・康・雅・允・昇・け・三)

六點 天道虫いつかは星になりたくて 孤舟 (紀・孝・堂・百・○昇・亜)

《吟》水切の数に歓声こどもの日 全 (五・龍・清・康・己・正)

《吟》かきつばた風に紫解き放ち 全 (紀・忠・く・清・正・昇)

◎《吟》黒松が昔を語る初夏の風 ただしげ (紀・孤・千・ゆ・隆・び)

道場の竹刀はつしと夏燕 堂哉 (紀・五・○健・己・け・天)

夏めいて素肌眩しく揺れる髪 國護 (そ・くす・た・龍・孝・允)

◎《吟》倒木にとかげの睡る隠れ沼 びん (孤・く・○と・千・啓・亜)

臆せず曲がって生きよ挨拶り花 百合子 (紀・○くす・忠・く・○孝・己)

新緑の風と連れ立つ小海線 昇 (そ・紀・健・た・國・び)

宇宙人になりて母の日母笑ふ 啓子 (紀・と・千・○び・亜・盛)

五點 《吟》花よりも水の匂ひて燕子花 孤舟 (紀・五・と・孝・康)

◎菖蒲湯に時差ぼけの身を沈めけり 康敏 (紀・孤・千・た・亜)

歌碑の裏誰(た)がひもときし落し文 全 (紀・くす・孝・己・啓)

◎母になる娘から届けりカーネション 亜也 (紀・孤・く・隆・○盛)

四點 杖突いてリハビリ散歩汗かかず 紀久男 (忠・龍・ゆ・規)

初鱈甘き醬油をたらす宵 五郎太 (紀・昇・啓・天)

◎《吟》吟行でひとりしずかの名に惹かれ 忠彦 (紀・孤・隆・規)

《吟》すだ椎の巨樹のありけり夏帽子 とみ子 (紀・び・三・天)

卯の花を貰いて唱歌くちずさむ 千恵 (紀・清・雅・國)

独り身の夜を賑わす金亀虫 正己 (堂・ゆ・び・天)

《吟》苔むせし巨木の蔭に額の花 ゆたか (康・○己・び・規)

見上げれば天の声満つ五月晴
 短くも主婦を忘れて初夏の旅
 初夏の風郵便受けに旅便り
 竹落葉吾生思えば鳥鳴く
 ◎ 麦秋や廃線跡を完歩せり
 〆 鳴き交わす鳥の森やおろち池
 戸を繰れば守宮ダイブす襟首に
 花水木満開の中吾子生まれ

雅夫 (五・ゆ・國・允)
 國護 (紀・堂・び・正)
 全 (紀・た・清・康)
 雅夫 (紀・〇龍・己・百)
 健介 (紀・孤・び・天)
 びん (紀・ゆ・百・昇)
 百合子 (千・堂・啓・盛)
 けい子 (紀・く・允・規)

三点

蚕豆は五粒だけでも酒の友
 包丁を研いで切れ味初夏の風
 〆 古沼を領することし川鶉をり
 〆 吾の中を緑の空気通過する
 吾子連れて幸せ探し昔蓆
 きびたきの己が高音に酔いてをり
 路地裏の鮎のてんぷら笹の舟
 矢車の音からからと孫の家
 メーカーは人ごととなりし商社マン

忠彦 (紀・くす・健)
 全 (百・亜・天)
 五郎太 (紀・千・盛)
 千恵 (紀・允・三)
 正己 (忠・と・啓)
 びん (孝・雅・啓)
 啓子 (紀・百・け)
 天牛 (た・び・規)
 全 (龍・雅・百)

二点

毛虫掌に載せ吟行句師のたじろがず
 (萬緑) 井の頭公園吟行の思い出
 明易し昔を想ふ床の中
 〆 風抜ける河鶉も吾も憩う池
 小旗立つチキンライスやこどもの日
 金星の力士汗の目つぶりたり
 〆 羽根抜け潜らぬ川鶉じつと待つ
 風を受け五月の空に泳ぐ鯉
 居酒屋で生け簀の蛸の刺身食う
 潔し異国の客の薄衣
 ◎ 〆 万緑や夢ははるかな空の上
 畑中の人に菜の花もらひけり
 紙風船悲しい過去を背負つてる

忠彦 (正・三)
 千恵 (紀・雅)
 康敏 (く・正)
 とみ子 (紀・び)
 全 (そ・け)
 ただしげ (孤・雅)
 ゆたか (紀・隆)
 びん (健・と)
 百合子 (孤・國)
 規雄 (堂・〇正)
 正明 (〇紀・允)

一点

好天気地主の友が虫送り
 友の上梓冷や酒(ひや)で祝いたき元吞兵衛
 万緑や生まれし本を軽く撫づ
 仁和寺や御室桜の若葉雨
 〆 吟行に半日遊ぶ若葉風
 彫り出だすやさしみほとけ若葉風
 〆 吟 句の友と歩めば楽し夏庭園
 庭先の牡丹は咲けり色さやか
 オペラ観て愁いはてなき夏夕べ

紀久男 (〇三)
 紀久男 (五)
 五郎太 (規)
 健介 (そ)
 とみ子 (た)
 全 (紀)
 ゆたか (隆)
 全 (國)
 全 (紀)

目に眩し青葉若葉の櫛道 　　ただしげ (紀)
 大振りの旬の筍お裾分け 　　國護 (紀)
 ソーダ水お堀のテラス初夏の風 　　國護 (び)
 新緑や小雨のあとのこの空気 　　千恵 (國)
 吾も着し制服見かけ夏はじめ 　　全 (紀)
 《吟》亭々のビルに囲まれ夏木立 　　びん (紀)
 《吟》とりどりの青、青、青の初夏の森 　　百合子 (紀)
 ◎ 靴もまた服に合はせて更衣 　　昇 (孤)
 傘を手に句詠めばそこにあやめ咲く 　　啓子 (紀)
 《吟》羽揚げ白頭鷺を鵜が気取り 　　亜也 (盛)
 杜若画が現実を重ねる 　　全 (紀)
 敦賀から新幹線かがやきで金沢へ
 かがやきに乗り納骨へ卯波かな 　　けい子 (五)
 愛子さん園遊会初参加
 赤坂御苑にはちける微笑麦の秋 　　盛雄 (紀)
 菊挿芽老人は世を忘れつつ 　　全 (三)

【句評・短評】

十一句句 病室は海見ゆる丘初浴衣 盛雄

孤舟選者：環境のよい病院での入院生活も長くなった。そろそろ更衣の時期を迎えたのだ。とみ子さん：早く快癒されるようにとの思いを込めてこのお句をいただきました。康敏さん：海の見える明るい病室。初浴衣が効いている。とは云え、早期ご退院をお祈りします。

十句句 首伸ばす亀の孤高や走り梅雨 啓子

堂哉さん：中七が良いですね！
 隆さん：池に出た岩の上か。亀の気持ちになった作者。
 盛雄さん：中七の、亀の孤高 が面白い佳句。
 ※紀久男：類句が多数ありそうな句です。

七句句 郭公鳴く茫々と風渡る中 規雄

康敏さん：枝ゆらす強風の中で鳴く郭公。静かな森のカッコからイメージが変わった。

六句句 天道虫いつかは星になりたくて 孤舟

堂哉さん：金子みすずの世界？健気に飛ぶ姿が浮かんできました
 百合子さん：調べてみました、「太陽神の使いの虫」、いつか星になりたい訳ですね。
 昇さん：メルヘンの世界。背中の斑点が星に見えてきました。いいですね！
 亜也さん：星になりたいのは天道虫か詠み手か？星は天道虫の背にある。

水切の数に歓声こどもの日 孤舟

五郎太さん：川に石を投げて遊んでいるのでしょうか？
 康敏さん：水切りを競うこども達、今年はこの日而立夏だった。

黒松が昔を語る初夏の風

ただしげ

孤舟選者・・・幹が複雑に伸びた老松の木は、長年のこの地の変遷を見守ってきた。
隆さん・・・江戸時代にも生きていた松かも。黙して語らない清々しさ。

道場の竹刀はつしと夏燕

堂哉

天牛さん・・・ムサシの古事をうまく表現しましたね。

夏めいて素肌眩しく揺れる髪

國護

ただしげさん・ほのかな艶めかしさがあって、面白い。

龍平さん・・・おそろるべき 君らの乳房 夏来る 〓西東三鬼〓

倒木にとかげの睡る隠れ沼

びん

孤舟選者・・・倒木の幹に何か黒い物。多分蜥蜴が一休みしているのだろう。

とみ子さん・・・吟行の限られた時間内での洞察力に感心いたしました。

千恵さん・・・小さなとかげも肺？を一生懸命動かして呼吸している姿に生き物同士として共感してしまいました

亜也さん・・・「睡る」が吟行時の実景を捉えて巧み。

臆せず曲がつて生きよ振じり花

百合子

孝岳さん・・・幾多の困難が待ち受ける実社会の中で、力強く生きて行く信念を振じり花の形容で良く表している。「臆せずに」が効いている。

新緑の風と連れ立つ小海線

昇

ただしげさん・初夏の爽やかな高原走る清々しい風景が見て取れる。

宇宙人になりて母の日母笑ふ

啓子

とみ子さん・・・心が通じて笑い合う 素敵なお母の日の光景ですね。

千恵さん・・・もう会話が時として成り立たなくなっても母の笑顔は嬉しいものです。

びんさん・・・老いて宇宙人になった母への長寿賛歌。

亜也さん・・・介護らしき重さを宇宙人が軽みに転じた上、笑うが救いとして絶妙。

盛雄さん・・・「宇宙人」となった老いた母、笑顔だけの母、子の誰しが出会う日常・・・

五点句

花よりも水の匂ひて燕子花

孤舟

五郎太さん・・・水辺の花は盛りを過ぎていました。

とみ子さん・・・水辺に咲く燕子花の美しい姿が、見えてまいります。

康敏さん・・・水辺に咲く大きな紫の花、水の匂いが梅雨間近を感じさせる。

参考「燕子花水のにはひをのぼらしむ 朝倉和江」

菖蒲湯に時差ぼけの身を沈めけり

康敏

孤舟選者・・・久し振りの帰国。日本伝統の菖蒲湯に浸かり疲れを癒す。

千恵さん・・・異国への長期出張のあとの菖蒲湯は疲れをとるには十分だったでしょうね。

ただしげさん・海外から帰国し、菖蒲湯で疲れを癒す様子を上手く詠んでいる。

紀久男・・・私にとって、今回の次点です。

母になる娘から届けりカーネーション

亜也

孤舟選者・・・間もなく新しい母となる出産間近の娘から心温まる母の日のプレゼントが嬉しい。

隆さん・・・出産を控えた娘さんからの母への感謝は一人。

「母となる娘にもらふカーネーション」でも。

盛雄さん・・・一句の中味が素晴らしい。我家では息子から妻に届きました。

杖突いてリハビリ散歩汗かかず

紀久男

龍平さん・・・お主も汗さえかかぬ御身になりましたか？ まんずは 長生きしておくんなはれ。 私の「吞兵衛会の手帖」より

※句会にて・・・汗「かかず」となると、季語としては疑問が残る。

初鯉甘き醤油をたらす宵

五郎太

天牛さん・・・最近テレビで甘い醤油があることを知りました。鯉にあいますかね？

紀久男・・・我が家では鯉の為の醤油は三種類。普通の醤油にオイスターソース、甘い醤油。

吟行でひとりしずかの名に惹かれ

忠彦

孤舟選者・・・ひとり雑念を払い、大自然と対峙して詩境に耽る作者。

隆さん・・・野草の名前。過去素敵な名前と思った。「吟行や一人静の野草知る」でも。

紀久男・・・「ひとりしずか」の「ず」は「づ」の方が良い。同じ仲間に「ふたりしづか」があるがこれは漢字「二人静」とするようです。

すだ椎の巨樹のありけり夏帽子

とみ子

天牛さん・・・黒々としたすだ椎の大きな肌になちよこんと真白な夏の帽子とはうまくとらえ

ましたね。

卯の花を貰いて唱歌くちずさむ

千恵

紀久男・・・リハビリのカラオケでこの卯の花の・・・を良く歌います。

独り身の夜を賑わす金亀虫

正己

堂哉さん・・・奥さんを亡くした友が、夜中に走り回る鼠が友達だ、出てこないと淋しいと

語っていました。

天牛さん・・・ただボーツと灯っている裸電球にコツンコツンと金亀虫が訪ねて来てくれ

たのでしよう。

苔むせし巨木の蔭に額の花

ゆたか

康敏さん・・・自然教育園は都心にありながら自然を保持している。鬱蒼たる巨木の蔭に咲

く額紫陽花もひっそりとした風情だ。

正己さん・・・視覚のコントラストが空間の奥行をもってはつきりと感じられます。

見上げれば天の声満つ五月晴

雅夫

五郎太さん・・・聖五月、マリアの月。聖霊降臨を祝う月。

短くも主婦を忘れて初夏の旅

國護

堂哉さん・・・初夏に限らず、お楽しみ下さい！上五にはろつとききました

初夏の風郵便受けに旅便り

國護

康敏さん・・・友人より旅の便り、初夏の風が運んで来てくれた。

竹落葉吾生思えば鳥鳴く

雅夫

龍平さん・・・竹自身は広範に根を張る大変な長寿者ですね

百合子さん・・・年齢の所でしょうか、落葉、落花にわが余日を思います。

麦秋や廃線跡を完歩せり

健介

孤舟選者・・・賑やかに列車が通っていた往時を偲びつつ、錆びた鉄路沿いを歩いてみた。

天牛さん・・・麦秋と廃線がありますね。どの位の距離だったのでしょうか。

紀久男・・・福知山線のあたりの廃線跡がハイキングコースになっているとか。作者が完

歩されたのはどこでしょうか

鳴き交わす鳥の森やおろち池

びん

百合子さん・・・あの鳥たちの鳴き交わす声がおろち池との取り合わせでさらに迫力満点。

※康敏さん・・・不気味な感じが出ていますが、季語がありません。

戸を練れば守宮ダイブす襟首に

百合子

千恵さん・・・ダイブすに臨場感ありました。

堂哉さん・・・私も一度やられました！豊中では永らく見ていません。シンガポールのマン

ションには沢山いました。

盛雄さん・・・ヤモリに跳び付かれた一瞬のオドロキ、立体感のある愉快的な佳句。

三点句

包丁を研いで切れ味初夏の風

忠彦

百合子さん・・・研ぎあげた後のあの爽快感はまさに初夏の風。

亜也さん・・・研いだ包丁同様にスパツと切れた佳句。

天牛さん・・・爽やかな感じが、うまく出ていますね。

古沼を領するごとし川鵜をり

五郎太

千恵さん・・・倒木の上に「我が世とぞ思う。」とばかりに羽を広げたり閉じたり放尿した

り自由気ままに時を楽しんでいる川鵜がおりました。

盛雄さん・・・伊丹の昆陽池公園は長年鵜の糞害で大変な目に会いました。

吾子連れて幸せ探し昔菫

正己

とみ子さん・・・お子さんと四つ葉のクローバーを探す。それこそ幸せなひと時と思います。

啓子さん・・・お子さんは女の子でしょうか。幸せ探しといえば四葉のクローバーでしょう。

昔菫という季語、初めて出会いました。幼い頃畑一面に咲く蓮華草を家畜の

馬が食んでいる図が印象に残っています。

きびたきの己が高音に酔いてをり

びん

啓子さん・・・きびたきの鳴き声は切れの良いピツピツというような高音で、都市部ではな

かなか啼いている姿は見られないようですが、作者は旅の中でよく聴かれる

のでしよう。季語としては「三夏」としているところもあるようです。

※紀久男・・・「きびたき」は角川歳時記によれば季語は秋。四十雀などにしたら良かったか。

路地裏の鮎のてんぷら笹の舟

啓子

百合子さん・・・日本の繊細な季節感があり、笹舟にのった鮎のてんぷら！

紀久男・・・いいですなあ、天・地・人の「人」とします。

矢車の音からからと孫の家

天牛

ただしげさん・・・最近矢車のついた鯉幟は見かけない。懐かしい風景を思い出す。

メーデーは人ごとなりし商社マン

天牛

百合子さん・・・まさに職場で実感していた光景ですね。

二点

毛虫掌に載せ吟行句師のたじろがず

紀久男

〔萬緑〕井の頭公園吟行の思い出

亜也さん・・・万里子先生の胆力という一面。

風を受け五月の空に泳ぐ鯉

ただしげ

孤舟選者・・・布製の鯉幟が、生きた鯉だったら楽しいだろう。

居酒屋で生け簀の蛸の刺身食う

ゆたか

隆さん・・・夏の蛸は格別。「生け簀から出てきたばかり蛸の刺」でも

万緑や夢ははるかな空の上

百合子

孤舟選者・・・前向きな夢はいつまでも持ち続けたいもの。

畑中の人に菜の花もらひけり

規雄

堂哉さん・・・こういう触れ合いを大事にしたいです。

正明さん・・・春は長閑で気が休まります。旅の句を天に頂きました。

紙風船悲しい過去を背負ってる

正明

紀久男・・・戦死した山中定次監督の「人情紙風船」中村眼右衛門の傑作名面を思い出しました。

一点

好天気地主の友が虫送り

紀久男

三恵さん・・・天をつけたにもかかわらず、申し訳ありません。情景が全く見えてません。でも、好天気、地主、虫？の取り合わせがとても衝撃でした。キュート。自分には絶対にそろい踏みできません。

友の上梓冷や酒（ひや）で祝いたき元呑兵衛

紀久男

五郎太さん・・・いただかない訳にはいきません！

吟行に半日遊ぶ若葉風

とみ子

ただしげさん・屈託なく吟行を楽しんでいる様子。いいですね！

彫り出だすやさしみほとけ若葉風

とみ子

※孤舟選者・・・やさしきは「ほとけ」に繋がるため、連体形「き」とすべきでしょう。

句の友と歩めば楽し夏庭園

ゆたか

隆さん・・・体験して初めて知る吟行の実感。

オペラ観て愁いはてなき夏夕べ

ゆたか

紀久男・・・どんなオペラでしょう。楽曲名を知りたいものです。

ソーダ水お堀のテラス初夏の風

國護

びんさん・・・三段切れが残念。

※康敏さん・・・爽快な句ですが、残念ながら三段切れ。それにソーダ水は夏の季語です。

季重なりです。

靴もまた服に合はせて更衣

昇

孤舟選者・・・(靴もまた) 更衣で服と靴のコンビネーションにまで心を配るのは立派。

敦賀から新幹線かがやきで金沢へ

かがやきに乗り納骨へ卯波かな

けい子 (五)

五郎太さん・・・列車名の かがやき はカッコで囲んだ方がいいのでは。一段落ですね。



【次回青葉会予定】

日程 令和六年六月二十七日(木) 十三時～

於：世田谷区三軒茶屋 世田谷区施設 会議室「しやれなあと」(移転！)

《ご注意下さい！ しやれなあと は近くですが移転しました。カバリングレーターに詳細記載しましたので、ご参加者には、必ずご確認の上、添付の地図も持ってお越しください》

当日ご出席者に於かれては、当季雑詠5句、ご投句のみの方々には2句を目処として 事前に当方(星田)までお送りください。当日の選句表を事前に作成致します。締切は 六月二十四日(月)中でお願致します。

【青葉会報】

一、五月の句会は恒例の吟行を催行。曇天ではありましたが時に薄日が射すこともある中で、港区にある国立科学博物館に所属する「自然教育園」にての催行でした。この方々も吟行かな、と思われるいくつかのグループをお見掛けしました。午前十時、「白山手線目黒駅集合、ゆたかさん、びんさんの今年卒寿のお二方も含め十一名が参加、自然教育園の中を三々五々散策をしながら、作句を楽しんでおられたようでした。事前投句64句、吟行句24句で全88句からの選句となりました。選句は、吟行句の中から1句以上を必ず採っていただき、いつも通り全部で6句選と致しました。

結果はご覧のとおり、盛雄さんが当季雑詠から十一句、啓子さんが吟行句で十句と高得点でした。今回も佳句が多く、票はばらつき九点・八点は無く、七点句に規雄さんの一句を見て後、六点句と四点句が多くなりました。吟行で詠まれた句は句のアタマに《吟》を付してありますので、当該句に自然園での雰囲気を含み取ってお楽しみいただけましたら幸甚です。会報編集担当としては、社友会への報告時に近影をお送りしようと思っておりましたのに、そもそもその写真を撮るのを失念してしまいました。残念・・・。

孤舟選者近詠

春光や地上に出でし地下鉄路
日蓮に流人の日あり鱒東風
細波に耳傾くる座禪草
回廊は風の十字路緑さす
雲梯の錆の手触り樟若葉

関係者近詠

春冷の病夫の喫煙黙認す
漫画にて文豪知り初む桃の花
入院中階ごと寄贈の大雛段
看病てふ夫婦の頁春の雨
有平棒浮かせて街の雪景色
外は淡雪スライド終はる記念館
焼山へ練膏薬をはりたしよ
星雲の渦巻解き蝌蚪の紐
蝌蚪探す爺子供らに溶けきって
譲渡会片や白毫もつ子猫
鞆にポニーテールの横なびき

真希子 石畳石の継目に名草の芽 陽亮
全 日の力人地の力木々芽吹く 全
全 海になりたくて河口に奔る雪解川 全
全 雪になるそぶりを見せて春の雨 全
弘子 涅槃西風妻の息吹が頬撫づる 全
全 待ち時間知らで幸せシネリア 全
全 長生きへ舵切る意欲青き踏む 全
森の座 横澤放川 選 (日経俳壇選者)

令和六年六月十日

(了)